

## 「中村哲医師の死を悼む」

2019年12月07日

中村哲医師がアフガニスタン東部のナンガルハル州で銃撃され、殺害されたというニュースに大きな衝撃を受けた。車で灌漑工事の現場に向かう途中、数人の武装集団に、殺傷能力の高い自動小銃などで襲われ、同乗していた運転手や警備員ら5人と共に命を奪われた。人の命に尊卑はないが、師は多くの人々の命を支える素晴らしい活動をされていただけに、師の死は、世界の人から惜しまれ、残念としか、言いようがない死であった。ナンガルハル州はタリバンに加え、イスラム国（IS）の組織が台頭して、治安が悪化していた地域だそうで、襲撃は計画的なものであったという。タリバンは今回の事件直後、「復興支援に取り組むNGOとは良い関係にあり、攻撃の対象ではない」と関与を否定している。ISはシリア北部に拠点を持っていたが、クルド人部隊を中心に多国籍軍から、攻撃されて弱体化し、世界に四散した。逃れて、アフガンに一拠点を持った彼らの襲撃ではないかという見方もあるらしい。殺害し、恐怖を煽ることを目的とした組織で、このような組織を生み出す現代社会の闇の深さを思う。

中村師は、九州大学医学部で学んだ医師であった。北西部のペシャワールでハンセン病患者の医療活動に携わったことがきっかけとなり、アフガン支援が始まり、ナンガルハル州に診療所も開いた。この間、内戦による国の荒廃と難民の状況を見続けてきた。アフガンは豊かで落ち着いた農業国であったが、他国の軍隊が入り、内戦が収まらない状態になった。師は、アフガンの平和には戦争ではなく、貧困問題を解決することが不可欠だと認識した。支援は医療活動と共に、干ばつによって荒れた農地を整備し、食料を得るための井戸や用水路の建設に向かった。師の現地に密着し、市民に溶け込んだ献身的な働きは、大きな支持を得、現地の人々を抱き込んでいった。掘った井戸は千六百本、用水路を作って水を通し、草も生えない砂漠が肥沃な土壌になり、緑溢れる畑に変わっていった。「戦争のことが伝えられることが多いが、食べ物がなくて命を落とす人が大勢いる。目の前の一人を救っていくことの積み重ねが、平和につながる」という信念を貫いてきた。師は下記のように語っている。ペシャワールについて語ることは「貧困、富の格差、政治の不安定、宗教対立、麻薬、戦争、難民、近代化による伝統社会の破壊、およそあらゆる発展途上国の抱える悩みが集中しているが、悩みばかりではない。我々が忘れていた人情と、むき出しの人間と神に触れることができる。」「援助する側から現地を見るのではなく、現地からの本当のニーズを提言してゆく。」「アフガンにもごく一部に心ない人がいる。私たちを守ってくれる人もいる。事件によってアフガン全体を断罪しないでほしい。」「アフガン人を愛し、彼らと苦楽を共にしている。」「アジアのノーベル賞」と呼ばれるマグサイサイ賞を受賞し、アフガン政府から勲章を受け、市民賞（名誉市民権）も授与されている。

2001年、自衛隊が米国によるアフガンでの対テロ戦争を後方支援するため、テロ対策特別措置法を審議する衆院特別委員会で参考人として呼ばれ、下記のような証言をしている。「自衛隊派遣は有害無益である。日本に対する信頼感が、軍事的プレゼンスによって一挙に崩れ去る。」米国追従で、日本への信頼が失われていくことへの危機感を訴えた。

「東京新聞」は、5日の社説で、師を「憲法の理念を体現した」と評している。来日したフランシスコ教皇は、武力を背景にした平和はあり得ないとのメッセージを残したが、師は教皇の言葉を、そのまま現わされた。荒んだ現状から平和を一途に追い求めた言動を心に留め、強い意志と深い愛に生きた師のご逝去を悼む。